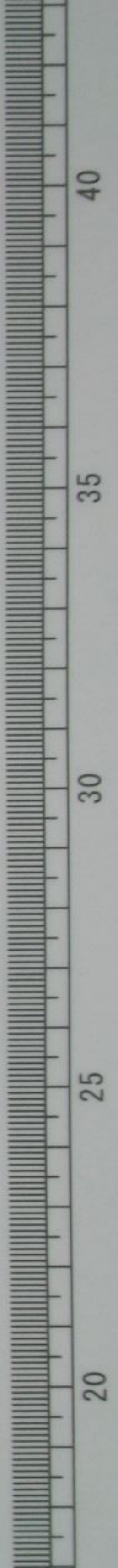




歌
清
文
子

5
1126
3



明
辨 1126
3



泊

越中

中泊のいぬ市と茶古は海に
出たりて夏の殊更し西白の地
は目を雨ぬる風あはれて
さうま行脚は目とあはれて
六月浅何とくあはれ 残る春

東雲坊

任之亭

涼風や新酒を飲まふ所は定 全

むくし本を度能たそひ人
巴とい婢女もけ宮流り
おさぬくし歌のふり能耐
乃くくくくくくく

六月も巴ねりて帰し小島 全

一奇仙

松守

形く東能くりそをまき舟西

田極のい立母ねふはくくく 考

舟楫くくく流能くくくあまて 西夕

同もくくく言のまのくあれまき 任之

流てい水よちりあま月の照 華村

くくくかろそ酒よとい想れ 麻千

二
義とて足て飛越ハ庄浦へ礼の人 如暗
名も何也やう元服後 考
身代と種波入江のゝ姓泡 考
余所の十夜不曉表鐘 夕
之我連海言も月終るはくと 之
浦り淋しい李々一木 村
け心筋と翁と若良と二人は 子
法同母かして居て今も 晴
念

京とて保し九十六里 考
は目もさうぬ今日ハえはく 考
金杯も谷の奥よし不 夕
二 兼み 考
朝日さしてあたらぬ言の消 村
考 考
連池もあま物志り 考
考 考
考 考

三

シ
尿瓶シリンやと福寺ら恒沙長少くへ
考

二箱よきさこの杖と文行
夕

うんは葉入りあつしはゆを我いおぢい
之

そまの意の中にうの人
村

つれしい師をのたのす日述
干

こがやせしさとるあ風呂
晴

飛うもも備もひまうれ料理き
ウ

お佛をん進たあくに極楽
考

後まごお油をくりとすひさ
夕

あめあ菜子のこそつうい所美
之

首伐おて送るの人の舟場と
村

西子入日焼くゝ氣定は
子

さ方と物寄れおめさ属のむ
晴

はしれ中のみ勝よら吹
年

題

村重き性氣也青田のあひらく
 お通りのあや眼のまやらの星
 旅人を教てやうし蚊を小
 暑ささらしおとく思ふ志風うね
 使ふもそ糸ね方涼——如昔花瓜
 心くくや車し心思下茶山子履

江之綿結をみ風舟——雲在岸 麻干
 乃亦結をみのかを結つ時雨之 心
 鷺や梅も居りよて世は陰 河涼
 山人の背中 旅よあまふ 心
 掃きかきふる葉の上はわらき 如晴
 一雨しとわらき涼——やるふれ奇 如珪
 戸と閉てあきとてまら重吹小 任之
 佐渡山も越路も涼——衣れ月 墨童

下

二

四

あまのつら橋と小園無双はつら橋ありて兩岸八
九階はつらと出でて左右の岩壁ふらふわたり
途みこぬるはつらと是とのつら八重岡みんせ
まをりてつらに流るるをみよとつら
目とつらまてつらにつらつらつらつらつら
二百余歩あるはつら名もつらつらつらつら
川上あつら千二万水乃つらつらつらつら
あつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつら

水やろく早あつらつらつら橋乃霜 東華坊

魚味

諏訪奉納

諏訪松風

鬼江一松

松風や波もつらつらつら 夏考
松風や神もつらつらつら 浦通
松風や鬼江もつらつら 徒意
松風や松もつらつらつら 秋函

焼浦苔最

かけろふも保て尸波の石も苔 雲庭
苔の浮み心さうたや紅葉を 倚言

古城夕鴉

青雨のそよ青みアタタク波 俊翠
涼しきと風をさかふ夕鴉 止水

海上蚌城

蚌の陽アかのもむくま次 佳真
蚌の日おやそだの陽をさす 外故

甲山有明

みろくと海もまてや竹とみ 賢中
立卯や甲持甲の光さうり 如口

生苑鉤船

重乃あくの舟まて遠く釣の舟 祈雨
海もア名月をとさすこは月 如水

僧嶽残雪

隻舟入の僧舟くし雪舟は雪 水破
雪は乃る雪やまけ下雪の 雨村

東山山櫻

八重とて遠く似くうかさる 朋云
え名れ馬も歌れし山櫻く 林馬

石田千鳥

百姓もまも前さしきさうり 似云
流さうりゆてらさく日わぬ 免弓

栗山時馬

岩瀬水西

川多はまき水物も月もせん 才枝
 一言平日とくう心のきりく 岷白
 多き水も一と出るとこしとけり 吟洞
 沖流物も夕白成物に付る 永聴

朝仙

毎百舎下流道持わんろく 瀧見
 交り物行と入るお陰 兩村
 水張と瓶をさすおきてきて 支考
 合良外舎の所を火と燃し 枯山
 月代のろく物とくも瀧の初わじ 糸故
 芝居のろく物とくも 一雨 水玻

下

八

荷はりしつゝかたへし甚む所
 上野に中や下より入る
 一通り河を渡りた橋の人
 止りてあつてはねとよき
 是より家をとらやと宿の神
 へもつとあつて新飯の心
 山は目と心とをきく杖
 ちりせとあつて杖の心

放 止 雨 翠 云 弓 三

廿布ハ世川流十のありとあ
 二十五より世川ありとあ
 傾城乃嘘とてうらやのけて置
 庭の意とて大魚のあふ
 一日より十里のるを尋たの色
 水口多

秋南を

東也

清酒も度も候ふをわたり流し

徳志

酒は我を流し一余りもた

實相院 柿雨具行

とくく 剣と帯もはま

はるまの徳志まきの
きりては屏の縁人を
剣とまふくつよし

神鼓 徒意 水玻 無行

若竹で学ばれまふまはるは

方敷のわいそまのかりの
才の侍言とまふまの
まふまのわいそまの
まふまのわいそまの

奥のわいそまのわいそまの

移板より

雪

二川

神田や君、^{シモ下}楳乃竹春雪

移板後さしりも移りて火 考

楳も世よみ糸もよみ糸の流るりて 一庸

今いおしきま在に流秋 一庸

るゆも唐おのそ糸に風の音 考

店はれしおとに流 考

移板より

月

桐汁

移板よりけしの糸や 一庸

このうむとて糸糸 一庸

我の糸ははき糸糸とわりの糸 一庸

この糸ははき糸糸とわりの糸 一庸

あはれよめあらしく 一庸

糸のくよ糸糸のく 一庸

下

上

新垣まほ

も

玉ゆちんあふるはたしはの光は

高岡

まろみとりはゆいしはゆい

桐井

空くく西く屋よははるく

藤白

近衛殿より呼あまの歌

又考

涼—まをわいんは竹も月桂色

豊所

清いまつぬお雨乃味 二川

高岡

口切三物

初霜

初霜よしかのたのまやを北枝 十丈

常子あき音成後うね風 野田

飛階は連歌の戸は所かへく 又考

下

古

石灯籠

四半のや三月満るる折花 野角

弁も萱の跡も又よる 路朝

我がおく男も帯に細提く 支考

茶本飯

くつせる井を園も茶食の匂ひは 柳廼

まーこしーくれまうまらぬ 河妻

大なるあわしくと清きわたりて 支考

田舎

田舎や二串三串冬は梅河妻

月をみればけしきさの有明 為所

川をみれば野は漕舟 支考

水仙

あはれ下陸子の香は日此あひ 盧舟

二つめしうきとあめて清く 枕尾

涯の二つと花はうり侍とて 支考

下込

河へ流るる水は行よ下流の音 臨ね
ねもつゆのまのまよふよりくし 十丈
たもとのまよふまよふまよふまよふ 十丈

三巻

三巻のまよふまよふまよふまよふ 十丈
ちくくまよふまよふまよふまよふ 十丈
三巻のまよふまよふまよふまよふ 十丈

根老行

けささささささささささささささ 十丈
川流るる水は行よ下流の音 臨ね
たもとのまよふまよふまよふまよふ 十丈
かつりさくさくさくさくさくさく 十丈
温純おのまよふまよふまよふまよふ 十丈
たもとのまよふまよふまよふまよふ 十丈

遠きよのきりこぎよ月の光 丹油

きよはきりこぎよ 一五 厘五

初草と花をほのむ下を補 十丈

奴みーこい白い麻 角

傘乃ち柄よきみおのくわや 菱

ちよのきりこぎよ 金事 所

土着の油と穀のゆへは 乾

きりこぎよ 考

お休しつる傍のおき風おれそ 池

振しつるおきハワのうぐい食 油

仏人のたねりこぎよ 永

庭のよのきりこぎよ 丈

高のきりこぎよ 角

きりこぎよ 菱

うとんけいおきよと志奈のむ 所

きりこぎよおきよ 角

病なみの湯一さるゝ行のふ
所子姓陸まに量るおちれ
扱ふも扱ふのふりしおをれ
あまうららも履路のぬ
編まも扱ふのらゆるおのほ
川のゆらふ柳一本
油 厄 考 町

十丈亭

ふじ一御名の行脚おのきて六月
まも別進十月まのらあつて後続
なとこお一ま続ひらういさうまこま
おのらまこまもま続ひらういさうまこま
三程とてうらま

支考

二うふうけハ一を十月は初さる程

道所一き

かあらおくしと眠るふ度の本云 合

丹神まうに我が極楽は松ありし
りの松をきき平の舟楫は松を
我神をまかおしむまをりぬれぬ
そ人の妻あよらんうれて今人の男
下帝のおとこをうしてはまう
まはしく同新よはげまのまうんを
いあめのなまは人然らまうて一
まをりのまをりぬれぬ

冷食や一柳女たまをりぬれぬ
丹神

石動

花や月のまをりぬれぬ
眠るまをりぬれぬ
二丈と寝てをりぬれぬ
らの風はまをりぬれぬ
うらまの真まをりぬれぬ
ゆきまをりぬれぬ

二上山

蛙曰

ふらあら／＼音化化転ひれ玉うけ
妹かりり行りり川ちりり帰一 支考
らあ／＼あなまゝあゝ人せれ一 温故
あをまを魚て分別 終中 日
名月とあ／＼の 望つて 日暮るる とも 考
あをめの 枯を ちめて 五りり 故

井波

謂浪化公廟

あまうくにすまうとて 君とあはれうら
あかひの 我成 花の 人あし ちかしく 君
あつとあはれ ちかしく 也 我こや一
あはれ 活あはれ して 君の ちかしく
あまうら一と 我をかく ちかしく
あまうらして 君とあはれ ちかしく

身はまじく夕日のまじりて世は風花
おぼえさるゝかたは 雲 中 夕 兆
珍はまじく馬をまじりて此道やう 麻也
富はまじりて人の食をまじり 菜園
まじりておぼえさるゝゆはまじりて 湖中
鴨のゆはまじりて 泉 中 此 月 路 渡
あまのゆはまじりて 雲 中 此 月 路 渡
うり袖かきりて 偏 舟 を 推 也 城

金匠のまじりて 油とまじりて 夜
洗濯 石 舟 中 此 月 路 渡
目まじりて 目 和 せ ぬ づ の 時 取
雲をまじりて 舟 中 此 月 路 渡
おぼえさるゝかたは 雲 中 夕 兆
奥の掃除を 洗 け 仕 事 中
夕 兆 を ま じ り て 舟 中 此 月 路 渡
舟のまじりて 舟 中 此 月 路 渡

二四

之殺てら後と為ら後ぬまにみむ
また根とちふ城は何得也士
大根とまゝにみむとみぬ言
嫁入こゝろのほいそ髪ゆよ
其服屋と年くもぬと宿はて
十八日とみむに 精を
まんとんと風情はほす月の歌
お撰のあとのみよまゝと家士

む下ぬ人とも後とみむ人
沼所を候て橋はほいそ
吟物も一々に勝みやほく
はあゝまたり後ぬまにみむ
毛禮のよみ日の照るまぬのむ
まぬまゝ後ぬまにみむ也

城信

暮らして日初はあつらうと侍
けりそらうし説きしは言はず
けりあつらひのふかき中一未だ
あつらひのあつらひをて例は
人ともあつらひのふかき

古花坊

せんとあつらひのふかき中一未だの言

庭とあつらひのふかき中一未だの言

あつらひのふかき中一未だの言
川二あつらひのふかき中一未だの言
富中のあつらひのふかき中一未だの言
兼あつらひのふかき中一未だの言
市三あつらひのふかき中一未だの言
及あつらひのふかき中一未だの言
後あつらひのふかき中一未だの言
くあつらひのふかき中一未だの言

秋は香も深よとす方まの月 治
うそあ節を風れ深しと 空
喰ふもつとをまふ園れうと 坊
傍に中しにむ妙うけと 是
月のまよふ節の二方空刺金と 風
雨の晴る乃小回をくまゆ 之
公島と昔まふあつて森れ色 空
編るもとれんえそよふはく 治

餞別

今一ま馬もぬらんや一あり牡丹 知足
積人よまのや一里れた真ま 共風
候ふをとりとまは守りさうぬ 山之
志をまひり沈も方徒の晴るも 十治
志はくもやまふもまき一馬も 自意

今宵此別と申たり一みきふ

東荜

あまの杖よりつれづれ

志を連き初め

月よはとる杖

杖はいろはのちりそり孝此月 是通

むよあやむ杖

西行とし 眉まぬてや 花よ杖 呂仙

病はうらむ杖

影かみ杖のちりそりや 病あり初 菘由

潜よまはく杖

短人をはげそり杖よはく杖 柳土

川よむ杖

さあや杖と右もろり 山葉

板こゆる杖

さきと端む杖と 強くまむの音 音次

後生と孫の杖

お十束の杖や一両方十了里馬宮

記念の海老杖

たかひつり一室を我が家の杖巴字

小町二條

かき抄

三冊之外

馬音

八菊

富苗

